

話劇『ウィンドミア夫人の扇』上演の変遷について

鈴木 直子

Abstract: This study is intended as an investigation of the transition of *Lady Windermere's Fan* on stage in the Republic of China. Oscar Wilde's *Lady Windermere's Fan* was adapted for the Chinese stage by Hong Shen (洪深) in 1924. The Performance by Hong Shen and Shanghai Xiju Xieshe (上海戲劇協社) was a great hit, and is known as the beginning of the first modern play in China. Why was it this much popular those days? For solve this question, I had investigated of newspaper (申報) and other magazine. From the result of investigation, fashion of performance in student theater and the influence of three cinematization can be pointed out. And it turned out that the performance genre changed with time. Stage play had decreased 1930's, but survived in radio drama, it have changed into a comedy since 1940's. It was found from the result that play is closely connected with other genre of entertainment, as time passed, one of modern drama changed comedy, comedy spread to the traditional district play (Huju 滬劇). We can find out *Lady Windermere's Fan* as a district play now.

Keywords: 『ウィンドミア夫人の扇』、洪深、学生演劇、話劇

1. はじめに

中国話劇史においては、1924年の上海戲劇協社による洪深演出の『ウィンドミア夫人の扇』(中国語タイトルは《少奶奶的扇子》)上演の成功が話劇の嚆矢とされている。この作品はオスカー・ワイルドの翻案作品であり、その後も学生演劇(復旦劇社他)や中国旅行劇団で上演された。また舞台だけではなく、明星影片会社が1928年(張石川、洪深監督)に、華新影片会社が1939年(李萍倩監督)に映画化するなど、人気作品として定着していた。なぜこの作品が当時これほど人気を得たのだろうか。『ウィンドミア夫人の扇』は当時の中国でどのように受容されていったのか。話劇史及び先行研究では上海戲劇協社の上演の成功については言及されるものの¹、戲劇協社以外の上演や映画作品にまで視野を含めた研究、作品の受容と変遷について言及した先行研究は管見の限りでは無く、筆者の疑問については未解明のままであった。こ

1 陳白塵、董健主編『中国現代戲劇史稿』(中国戲劇出版社 1989年)では「脚本に合わせた練習、演出、演技と舞台美術が厳しく決められ、中国現代演劇史上初めて完全な演出家による上演を確立させた。立体背景を運用し、照明も時間や雰囲気と転換する。また道具の準備や舞台監督の設置など、国内ではいずれも初のものであった。こうしたやり方は全面的に文明新戯の演劇の陋習を廃し、正しい中国話劇芸術の上演規範を打ち立てたのである。」(p.320)と評価している。また上演の詳細は瀬戸宏「上海戲劇協社『若奥様の扇』(《少奶奶的扇子》)上演をめぐる」(日本中国学会『日本中国学会報』第45集 1993年10月)による先行研究があり、脚本、俳優、方言ではない国語の使用、舞台美術の良さ、観客層、男女合演の実践が成功の要因であったと結論付けた。脚本に着目した先行研究には白井啓介「洪深の扇—Lady Windermere's Fan から『少奶奶的扇子』へ」(文教大学『文学部紀要』11巻2号 1998年)があり、洪深の自然な台詞への翻案の巧みさを指摘している。

の疑問を解明するため、本稿では戯劇協社上演後の『ウィンダミア夫人の扇』の変遷を追い、中華民国期における話劇受容の一例として取り上げたい。上演の変遷を追うにあたり、『申報』での報道を中心に²、『良友画報』や雑誌に掲載された上演記事を調査し、当時の報道から『ウィンダミア夫人の扇』の変遷を探ると同時に、変遷から見えてくる話劇の受容という問題について考察し一定の結論を導くことが狙いである。

2. 上海戯劇協社の『ウィンダミア夫人の扇』について

『ウィンダミア夫人の扇』はオスカー・ワイルド原作の『Lady Windermere's fan』(1891)を洪深が翻案し、1924年5月に上海戯劇協社により上演され成功を収めた。あらすじは以下の通りである。

ウィンダミア夫人は夫のウィンダミア卿がアーリン夫人と交際していると誤解し、自分に好意を寄せるダーリントン卿の所へ行く。アーリン夫人はウィンダミア夫人の実の母であり、ウィンダミア卿にはそれを打ち明けていた。かつての自分と同じ不倫の過ちを犯そうとする娘をアーリン夫人は説得する。アーリン夫人に説得され、ダーリントン卿の家を去ろうとした時、ウィンダミア卿たちがそこに現れる。室内に自分の妻の扇があることから妻とダーリントン卿の仲を疑う夫だが、アーリン夫人が扇は自分の物だと言いその窮地を救った。アーリン夫人は娘には自分が実の母親であることを隠したまま去っていく。

この作品について、葛一虹主編『中国話劇通史』(文化芸術出版社 1997年)では以下のよう述べている。

「この劇はイギリスの唯美主義作家ワイルドの名作『ウィンダミア夫人の扇』の改編であり、上層社会の一对の母娘の異なる運命の葛藤を描き、イギリス紳士階層の偽善を強烈に諷刺したものである。原作はストーリーが曲折し、言語は精粹であり、機智に富んでいる。洪深は原作のストーリーを踏襲し、人物の環境、性格、言葉、風俗習慣を中国化させ、脚本そのものが人を引き付けた上に、中国の観衆の情緒に適合させた。」³

こうした評価は洪深の同作品に対する評価として定着しており、現在の洪深研究においても肯定される評価である。では、上演当時の1920年代における評価はどうであったのか。それを知るために、1924年4月29日の『申報』にある劇評⁴を見てみたい。

この劇のあらすじは、社交と恋愛問題を重視しており、その中でかつて墮落し、改善を謀り、社会の誇りを卒した母親が、墮落しようとしている母親を知らない娘を救い、慈母の涙を誘う。この母娘の墮落は、社会人士に逼迫させられたものであり、(母である)金女士がいかに墮落したのかといえば、婚姻の不自由による墮落であり、若奥様がいかに墮落するかは、正統派で良い人と思われる陳夫人のずるがしこさによるものである。社会は墮落した人を知るばかりで、墮落の原因を問わない。落とし穴から良い人が思い違いにより、あるいは社会に迫られてのことであるのに、社会はその人を攻撃し、完膚なきまでに、人類の歯牙にもかけず、新たな道も絶ってしまう。よって悪人はますます悪く、善人であってもそうあるのは難しい。社会の冷酷さはこのようなものであり、人心の卑しさも加わり、劇中の劉伯英は数語であってもまたこれ(人の欠点をかばい、その長所を褒め上げる社会)を罵る。英国の大作家ワイルドの社会を攻撃

2 『申報』(申報館 1872～1949年)。今回の調査では、東洋文庫の所蔵する申報DB(北京愛如生数字化技術研究中心 2012年、資料番号DG10028)を利用した。

3 葛一虹主編『中国話劇通史』(文化芸術出版社 1997年) p.64。

4 『申報』(18378号)「戯劇協社公演英國名劇」。

する『ウィングミア夫人の扇』という作品を戯劇協社が紹介するのは国の人にとって必要なためであり、『ウィングミア夫人の扇』は「社会病派案」の一つであり、社会問題に関心をもつ者は、この劇を見た後、今日社会病のための一つの対処療法とすることだ。」

また『少奶奶的扇子序録』⁵には、以下のようにある。

「洪深『ウィングミア夫人の扇』はイギリスのオスカー・ワイルド作の『Lady Windermere's Fan』を訳したもので、(ワイルドの)30年前の作品である。これまで写実派の劇というのは最も時代遅れとなり易く、ある時期の社会を描こうとするに、時は移り、社会の外観はすでに以前のようなではなくなる。よって劇が描こうとするものは、当時は切実であればあるほど、時が過ぎれば真を失うのである。この劇がその時盛名を得て、現在に至るまで人口に膾炙しているのは、描いている内容が、社会悪の様相だけでなく、人類の生来の弱点にまで及んでいるからである。社会悪の様相は時代によって、地域によって変わる。生来の弱点は、古今東西多くは似たものである。よって劇中で描かれていることは、わが国の情景と大いに似ているのである。」

同作に対して、上記で引用した文章からは以下のことが分かる。一つには、墮落した母親について、彼女は婚姻の不自由によって、社会によって墮落させられた存在であり、慈母であるということを強調している。またもう一つには、社会悪を攻撃し、社会病を良くするということを謳っている。『ウィングミア夫人の扇』は、当時の社会(婚姻問題、墮落した人間が生まれ変わる事ができない社会)、人の心の卑しさを描いたものであり、「今日社会病の病状を良くする」ものとして受け止められていた。

3. 『申報』から見た戯劇協社後の上演

1924年の戯劇協社の上演後、『ウィングミア夫人の扇』はどうなったか。本節では戯劇協社後の上演を『申報』に掲載された劇評や記事により整理してみたい。

1924年6月12日の『申報』⁶には、「四校表演戯劇」という記事が見える。内容は中国公学商科大学の新劇社が卒業公演に同作を上演するというものだ。新劇社は男女の劇団員がおり、特別に戯劇協社の洪深及び陳顛謨両者の指導を受けたことも分かる。この公演は6月16日に劇評が掲載された⁷。劇評からは来賓者は数百人であり、おおむね好評であったことが窺え、6月30日に再演された。(資料①)

1926年2月24日には戯劇協社による上演の告知が掲載された⁸。これは谷劍塵、応雲衛、孫少安の3名の新春聚餐会委員が旧暦正月十六日正午に社員による社章と春季上演についての決議を行い、『第二の夢』と『ウィングミア夫人の扇』を三日間、『趙閻王』(洪深によるオニールの『皇帝ジョーンズ』翻案作品)を一日中央戲院にて上演するというものである。ただしこの上演が実際に行われたのかどうかは不明である。

1927年8月2日には「上海婦女慰勞会」の記事が見える⁹。8月4日、6日に上海婦女慰勞会が中央大戲院で公演を行う上演広告も掲載された。

1929年5月26日の「劇場消息」¹⁰によれば、

「徐心波、李嬰等の劇社芸社を組織するという揚言は、近来戯劇運動の空気が次第に濃厚とな

5 原載は1925年の《劇本彙刊》第一集。『洪深文集』に収録されたものを参照。

6 『申報』(18422号)。

7 『申報』(18426号)。

8 『申報』(19028号)「戯劇協社將舉行聚餐 春季將有大規模之表演」。

9 『申報』(19537号)。

10 『申報』(20179号)。

り、話劇団体が雨後の筍の如く生まれるかのようなのであるが、台詞に国語を用いる者が多く、本社は上海で熱心な演劇青年の組織するものであり、まず広東語での上演を主張する。社員の徐心波、曾善仁、歐文光、頼麟書、李敏、庵容綿、李瓔、黃英、張冰清、張玉清、鄭玲珍等は以前広東話劇界へのすばらしい貢献があり、現在我々は陳大悲の『張四太太』、洪深改作の『ウィンダミア夫人の扇』、田漢の『名優の死』及び『カフェの一夜』等の数本の脚本をリハーサルしており、最短時間内に公演する準備をしている。」

とある。この記事からは、上海における広東人の話劇劇団が存在し、彼らが上演作品に当時の代表的な話劇作品を選択していたことが分かる。

同年の7月には天津南開大学女学生新劇団がやはり『ウィンダミア夫人の扇』を上演作品として選んだ。南開大学新劇団は、同作を上海戯劇協社が上演した翌年の1925年5月に卒業生による公演を行っている。以来数年間に渡り定期的に卒業公演や遊芸会で同作を上演しており、『ウィンダミア夫人の扇』が当時話劇の定番作品として学生演劇の中で位置付けられていたことを示している。南開大学における同作の上演については、次節で後述するため、ここでは言及だけに止めておく。

同年の7月11日には、蘇州の東呉大学で「四大ダイヤモンド」と呼ばれる女学生の内の一人呉劍群に関する紹介記事が掲載されている¹¹。

「現在蘇州で活躍する数人の女学生を、読者にご紹介しよう。その中の四名は上海の著名な女学校から転校してきたのであり、男子学生から彼女等を上海四大ダイヤという雅号を送られた。そこでその四大ダイヤの一人について以下の紹介文を読んで欲しい。呉劍群、蘇州慧靈女学卒業、演劇を善くし、かつて『ウィンダミア夫人の扇』の金女士を二度演じ、観客は拍手を絶やす者がいなかった。」

記事には写真を翌日に掲載するとあり、演劇に長けた女子学生への関心の高さを示している。

1930年には、中華婦女節制会の遊芸会に関する記事が掲載された¹²。四川路横浜橋中央大会堂に於いて遊芸大会を実施するというものだ。京劇の名優梅蘭芳が公益事業にも熱心でこの遊芸会にも関わっており、開幕の辞、孤児院の児童部による唱歌や遊戯、障害者や物乞いの子供が境遇を語る慈善的な演目の外に演劇『ウィンダミア夫人の扇』の上演が行われた。上演は滬江大学華北同学会によるもので、戯劇協社の応雲衛演出である。この上演に関する周世勳による劇評が1月18日に掲載されている¹³。凍る雪の中を観劇に出向いた周世勳は、「この夜の劇は、応雲衛演出のものだ。即ち『ウィンダミア夫人の扇』である。この扇は私はもう幾度となく観たことがある。しかし最も私を満足させ愉快に、感動させたのはやはりこの一夜である。」と称賛した。

同年6月5日には、培成女学生が同作を上演するという記事がある¹⁴。培成女学校は1925年に上海で外国人が設立した私立学校であり、裕福な子女の通う学校であった¹⁵。「近頃の上海の演劇熱により、戯劇協社が『ベニスの商人』を、辛酉劇社は『ワーニャおじさん』を、復旦劇社は『シラノ・ド・ベルジュラック』を、南国社は『カルメン』をといた具合に名作の上演が

11 『申報』(20223号)「東呉大學の四大金剛 心蘭紅黒合記」。

12 『申報』1930年1月9日(20402号)「婦女節制會遊藝會訊」及び10日(20403号)「婦女節制會遊藝會消息」。

13 『申報』1930年1月18日(20411号)「大會堂之夜 周世勳」。

14 『申報』(20540号)「培成女生將演少奶奶的扇子」。

15 「上海年華 図片上海」を参照。創設者は Anna Besant。

<http://memoire.digilib.sh.cn/SHNH/tpsh.jsp?action=tag&item=114&value=%C5%E0%B3%C9%C5%AE%D0%A3>

相次いだ。それにより培成女学校の女学生等も「このような芸術の空気の薫陶を受けた」という。

「脚本は紹介するまでもなく、誰もが洪深の翻案作品だと知っている。数年前戯劇協社が唐瑛女士の主演で上演し、去年、北平の精華大学、天津の南開大学でも上演された。今回の培成の女学生等は、この戯劇運動の中でも異彩を放つため、人選問題に於いて非常に注意し、才色兼備の陳敏徳に主役を担当させることを決定した。陳敏徳は北方の出身であり、国語を話すこと伶俐で純粹である。その上そのしなやかな姿は劇中人物の身分と適合するものである。」

公演日は6月16日オリンピックシアターにて、入場券は1元2元の二種とあり、「何本ものソーダを飲み、何個かのアイスクリームを食べるより観劇の方が割に合うだろう」と結ばれている。

6月8日¹⁶には、同校の女学生がリハーサルや衣装作り、切符売りに奔走する様子が伝えられる。記事には授業後だけでなく、土日も練習に励み、また「劇中人物の服飾は十分モダンな故、一人一人が新衣装を作るのに数十元を惜しまず」とある。切符をさばくのにも東奔西走するのはオリンピックシアターの賃料の高さによる。このような努力の結果、主演の陳敏徳と特に母親役の繆來鳳は好評で¹⁷、男性を女子が上演したことで生じた違和感もあったものの、成功を取めた。この上演の写真は、当時のグラフ雑誌『良友画報』や『学校生活』にも掲載されている¹⁸。(資料②)

1931年の3月25日には、裨文女子校が4月11日に校舎建設のための募金を目的とした遊芸会で『ウィンダミア夫人の扇』を上演するとの記事が掲載された¹⁹。会場はライシャムシアターである。裨文女子校は1850年にアメリカのキリスト教教会の牧師により設立された裨文女塾を前身としている²⁰。その後1881年には聖マリア女学に合併されるが、1931年に裨文女子中学となった。ちょうど遊芸会は女子中学として再出発する時期に行われたことが分かる。

1936年5月4日には中国旅行劇団(中旅と略)による上演があった。中国旅行劇団は1933年に唐槐秋により創設された移動劇団である。創設から3年経ったこの時の李一による5月7日の劇評には、「『雷雨』、『椿姫』、『梅羅香』に次いで、我々はまた中旅の『ウィンダミア夫人の扇』を見た。国難の極まる現在、猶これあり」と厳しい評価をされている²¹。中旅が選んだ演目はいずれも話劇の著名な作品²²であるが、中旅を率いた唐槐秋は自分で脚本を書く力量が無かったので著名な作品を選んで上演した²³。9月7日の記事によれば、「『雷雨』を除けば、その他の脚本『ウィンダミア夫人の扇』や『梅羅香』等はみな軟弱過ぎ、唐槐秋もそれは「技術上の見本」であると自認している」とある。すでに30年代も半ばのこの時期になると、『ウィンダミア夫人の扇』のような作品は時勢に合わない「軟弱」なものに見なされていたことが分かる。

中旅の公演以降、新聞上に掲載されるような公演は見当たらなくなった。1940年代に入る

16 『申報』(20543号)「忙煞了培成的女生 木」

17 『申報』(20554号)「培成公演的少奶奶的扇子 劍」

18 伍聯徳主編『良友画報』1930年10月号(台湾商務印書館 1990年)、『学校生活』(1930年10月)は上海図書館所蔵の電子資料で参照したものであり、詳細不明の雑誌である。

19 『申報』(20823号)「裨文游藝大會預誌」。

20 熊月之主編『上海通史』第六卷(上海人民出版社 1999年) p.222 参照。

21 『申報』(22635号)「少奶奶的扇子」観後。中旅の公演については、先行研究に瀬戸宏「中国旅行劇団と曹禺『雷雨』—抗戦以前を中心に」(中文研究会『未名』17号 1999年3月)、陳樾山主編、劉平副主編『唐槐秋与中国旅行劇団』(中国戯劇出版社 2000年)、洪忠煌『話劇殉道者—中国旅行劇団史話』(浙江大学出版社 2004年)が挙げられる。

22 曹禺『雷雨』(1934年)、『椿姫』は話劇の前身である文明戯の時期から上演されているもの、『梅羅香』はユージン・オルターの『最も安易な生き方』を顧仲彝が改訳したものである。

23 『申報』1936年9月7日。

と、1941年3月10日、11日には、復旦劇社による上演広告が掲載されている²⁴。演出は姚克、舞台監督顧仲彝、切符は2元と1元。会場はラッフル劇場であった。この上演は復旦劇社の上演記録とも一致する²⁵。

1941年5月7日には、東呉大学が募金のため『ウィンダミア夫人の扇』を上演した。

1942年9月2日の「遊芸界」には、ライシャムシアターの現況について述べてある²⁶。ライシャムシアターは「貴族化した劇場」であり、常に西洋劇を上演してきたため国内の観客は少なかったが、今春「楚霸王」を上演した後は演劇ファンの注意を引き、後に姚克が上演マネージャーとなり、「唐家班」の上演により熟し始めた。しかし劇場が封鎖されたために苦境に陥ったという。封鎖を解かれ、管理面で新たな組織として出直しを図ったところ、演劇の上演に適した劇場であるため劇団の上演申し込みが殺到した。結局会社当局の同意と強力な後ろ盾のあった陸露明が上演権を獲得し、9月15日から『ウィンダミア夫人の扇』を上演する運びとなった。「陸露明は許幸之のおかげで舞台上では相当な名声を得たが、銀幕上では十分な志を得ず、中聯に進んだ後は梅熹との共演のみであった。この度の舞台での『ウィンダミア夫人の扇』が、名声を取り戻すことになるかもしれない。」と記事にはあるのだが、上演後の劇評などが掲載されていないことから、この上演はそれほど話題とならなかったと推測できる。

4. 天津南開大学における上演史

前節では『申報』に掲載された報道を基に『ウィンダミア夫人の扇』の上演を整理したが、本節では天津南開大学における同作の上演史を紹介したい。南開大学は早くから新劇団を抱え、話劇の創造と実践を担ってきた。上海で盛んとなった話劇が、北方にどのように伝播していったのかを考察する際、それが学生演劇の中で発展していったという経緯がある。北方での学生演劇をリードしていたのが南開大学であり、南開大学での『ウィンダミア夫人の扇』の上演は上海の話劇が北方に伝播した過程を物語るもので、看過できない重要な部分である。なお南開大学での上演については、以下全て『南開話劇史料叢編』の編演記事巻（以下史料叢編と略）²⁷を根拠としている。

前節でも触れたが、南開大学が『ウィンダミア夫人の扇』を最初に上演したのは上海戯劇協会の公演の翌年1925年5月のことである。その年は同作の原作者であるワイルドの死後25年に当たり、南開大学週刊でもワイルド特集号を組む予定であった²⁸。5月には同年に卒業する学生の記念冊子作成と卒業準備金のための募金を目的とし、2日間の演劇の上演が企画された。そこで選ばれたのが同作であった。この上演は『ウィンダミア夫人の扇』の天津での初演であり、大勢の観客が見込まれた²⁹。切符は甲1.5元、乙1元であり、南開の学生であれば300枚に限り乙席が半額であった。5月10日の『天津泰晤士報』には劇中の金女士に扮した者が「豪奢放蕩であり、あまり似つかわしくなく改めるべきだ」という劇評が掲載されたようだ³⁰。観客数は天津中の人士が集まり5、6千人を下らなかったという³¹。

24 『申報』(24066、24067号)。

25 『復旦劇社與中国現代話劇運動』(楊新宇 広西師範大学出版社 2006年) p.176。

26 『申報』(24590号)。

27 崔国良主編、南開大学出版 2009年。

28 『史料叢編』p.454。1925年3月23日。

29 『史料叢編』pp.454～455。1925年5月2日～3日。

30 『史料叢編』p.455。1925年5月22日。

31 『史料叢編』p.457。1926年5月3日。

1926年5月にも同様に卒業準備会の遊芸会が開催された。この年は美術大家の王樹勳が若奥様を、交際大家の楼兆楯が金女士を演じると伝えている³²。

1927年12月には女学生会による遊芸会での上演が決定し³³、この上演の様子は『良友画報』でも伝えられた³⁴。(資料③) 1928年の11月の女学生会一周年記念大会でも上演されている³⁵。

1929年5月には南開校友天津分会の災害募金のため、女子学生会による上演を行った。会場はフランス租界の明星大戲院に改められ、一階前二列は2元、一階二階の後部席は1元、6部屋個室は15元であった。南開新劇団の『哀れな斐迦』も同時に上演され、良い成績を取めたという。売上は1076元にも上り、広告、印刷、賃料やその他必要経費360元を除き716元が残り、半分を天津連合救助会に、半分を校友楼(科学館)への寄付とした³⁶。

なお同年には、日本でも留学生により『ウィンダミア夫人の扇』が上演されたという。南開大学の著名な音楽家である黄女士は、日本の東京青年会遊芸会でも上演し、観客の賞讃を浴びた。日本に留学中の南開出身者王家駿は、南開留日分会の会長であり、校友楼の建築基金募金のために上演を企画したという³⁷。残念ながらこの日本での上演に関しては、現在のところ日本側の資料は見当たらないが、日本の留学生演劇の貴重な証言としてここに挙げておく。

5. 『ウィンダミア夫人の扇』映画版の影響とその変遷

『ウィンダミア夫人の扇』は舞台以外に映画化された作品が存在する。一つは1925年のワーナー・ブラザーズ社によるエルンスト・ルビッチ監督作品である。出演はメイ・マッカヴォーイ、バート・ラティル、アイリーン・リッチで、この映画は1926年に上海で上映され、ヒットした。1926年2月16日の『申報』³⁸には同作の映画放映の盛況を伝える記事が掲載されている。記事によれば、北四川路の愛普盧影戲院で元旦から放映されている同作が毎回観客千人近くにも及ぶという。

1926年4月30日の『申報』³⁹にも「上海大亜影片有限公司謹啓洪深為少奶奶的扇子啓事」が掲載されている。啓事によれば、劇の内容は舞台劇と同様である、映画の中の説明が全て英語のため、細かい描写となると英語の分からないものには味わえない、そこで百代会社が映画の中に舞台で使われた台詞を入れることにしたとある。舞台の台詞は洪深の翻案作品であり、洪深版の『ウィンダミア夫人の扇』がハリウッド映画にも反映されることとなった。

ハリウッド映画の外に、中国映画でも2作の『ウィンダミア夫人の扇』が製作された。一つは1928年の明星影片公司作品で、張石川、洪深が監督したものである。もう一つは1939年に華新影片公司が製作した李萍倩監督作品である。こちらの1939年の作品は現在でも映像が市場に出回っており、我々が目にする事ができる。1928年の洪深監督作品は、北京の国家図書館の目録上にはあるものの、現物の存在は不明のため、未見である。上映広告上には、「全世界に知られた愛情社会劇」という説明がなされている。(資料④)

著者の調査によれば、『ウィンダミア夫人の扇』に関する『申報』の記事が多かったのは、

32 註23に同じ。

33 『史料叢編』pp.460～461。1927年12月初。

34 『良友画報』1927年7月号。

35 『史料叢編』pp.470～472。1928年11月2日及び11月17日-12月1日。

36 『史料叢編』pp.478～479。1929年5月初及び5月10日、25日。

37 『史料叢編』p.484。1929年本年秋季。

38 『申報』(19020号)。

39 『申報』(19093号)。

1924年と1926年である。1924年は上海戯劇協社の後に舞台上での上演が増加していったため、1926年はハリウッド映画が公開されたため、映画広告記事が増加したのが原因と考えられる。そしてハリウッド映画版が中国に広まったことにより、作品の内容を誰もが知ることとなり、舞台化される機会が増加したのではないだろうか。「百看不厭最有含蓄曾經轟動全滬之唯一好影片」（百回見ても飽きず、最も含蓄ある、かつて上海中を轟かせた唯一の好映画）と広告でも謳われるように、1920年代後半には同作がすでに人口に膾炙した人気作品となっていた。

『ウィンダミア夫人の扇』の舞台上での上演は1924年から1925年、1926年、1927年、そして明星版が公開された後の1929年をピークとしていることが『申報』の上演記事調査から判明する。しかし、1930年代になると、時勢も影響して同作は上演される機会を失っていく。1932年には同作に関する新聞記事は皆無であり、1933年にもわずかに3件のみであった。それも上演記事ではなく、「数年前に『ウィンダミア夫人の扇』を上演した戯劇協社」といった具合に、戯劇協社の枕詞として使われたのみである。30年代には国民党による弾圧が強まり、左翼化した話劇界の人々にとっては上演場所を封鎖され、自らも迫られるなど、演劇の上演に制限を加えられた時期を迎えた。そのため、『ウィンダミア夫人の扇』のような資産階級の好む作品は思想的に問題視され始めたのもこの頃である。舞台上で公に上演されなくなった演目がどこにいったのか。その行き着いた先は、30年代になり興隆したラジオ劇であった。1934年の『申報』には、「無線電播音節目」という欄⁴⁰があり、ラジオ劇の番組プログラムを掲載していた。そのプログラムには、「歌唱」「弾詞」「国学」の外に「話劇」があった。『ウィンダミア夫人の扇』はこの「話劇」の中で生き残っていたのである。プログラムによれば観音社というラジオ劇の劇団が午後7時15分から8時までの間『ウィンダミア夫人の扇』を放送したことが分かる（資料⑤）。

ラジオ劇の時期を経て、その後の同作は、1940年代になると「書場」のような遊戯場で上演されるようになった⁴¹。（資料⑥）『申報』での40年代の『ウィンダミア夫人の扇』に関する記事は、ほぼこの遊戯場での上演広告である。遊戯場は滑稽戲のような大衆的、通俗的な演目を上演する場所であり、元は話劇作品であった同作が上演された西洋劇場から一転し、お笑いの要素を含んだ滑稽戲へと変質したことを示している。このように『申報』の上演記事から、話劇作品『ウィンダミア夫人の扇』が1930年代にラジオ劇に変わり、最後には遊戯場の滑稽戲の演目へと変容していったことが窺えるのである。

6. 『ウィンダミア夫人の扇』の変遷から見えてくるもの

以上、話劇作品『ウィンダミア夫人の扇』の上演の変遷を辿り、そこから何点か指摘すべきことは以下の通りである。

まず、この作品は学生演劇の中でも特に女子学生が好んで上演したことが分かった。主役が母娘の女性であり、妻の過ちや母の墮落を諷刺し、墮落したとはいえ母親の愛情を描いた内容は、当時の中国でも受け入れられ易かったのではないだろうか。劇中の母娘は「良妻賢母」イメージの反転としてむしろそれを強化するものとして機能したともいえる。「社会によって墮落させられた可哀そうな女性」の姿は、観客の同情を誘ったはずである。そして自分と同じ道を歩もうとした娘の窮地を救い、娘を「良妻」の位置に引き戻すことで、母親の行動は善行となり、娘への愛に溢れた慈母として描かれる。慈母のイメージは女子学生が上演するのに何の支

40 『申報』1934年12月18日（22151号）。

41 『申報』1940年7月8日（23830号）。

障もきたさない。また上演する側の女学生も、キリスト教系学校や英語の盛んな学校の学生であり、上流の出身であったため、作品の世界に馴染みやすかったと思われる。同作は上流社会の、機智に富んだ、母娘の愛情物語として受容されていたと考えられるのである。

次に指摘すべき点は、同作が演劇だけではなく、ハリウッド映画や国産映画として上映されたことにより演劇、映画の相乗効果で広く流布したということである。舞台上での成功だけでは、ここまでの人気と流行を生み出せなかったに違いない。映画作品の方が中国全土に広がり易く、その影響力も大きかったはずである。また映画のヒットにより、『ウィンダミア夫人の扇』の翻訳本が上海世界書局から出版され、出版物により各地に作品が伝播していくことを後押しした。

流行の一面には、そのファッション性も大きく関係している。ハリウッド版や華新版の『ウィンダミア夫人の扇』は、ソフィステイクードラマと上流社会のファッションが目目を引く。髪型や小道具の扇、服装など当時の流行スタイルは映画の観客層にも受け入れられた。特にそのファッションは女子学生が真似をしたくなるものであり、同作が学生演劇の中でも女子校で上演演目として人気を得たのはこうしたファッション性が大きく影響していたものと推測できる。

しかし、1920年代にはモダンでファッションナブルな演目であった同作が、1930年代には「時勢に合わない」劇となり、「国難の時期に」と非難されるようになっていく。内容もブルジョワの退廃を描くとして、左傾化する演劇界では時代遅れなものに見なされるようになった。ただ人々がよく知る物語として、それはラジオ劇の中で存続していた。やがて1940年代になると遊戯場で上演され、滑稽戯のコメディ演目として生き残っていく。1940年の上演広告を例に挙げれば、「笑話百出」「娘が母親を恋敵とみる」「上層社会の怪現象」といった宣伝文句が続くように、もはや社会を映し出すことも親子愛を謳う内容でもないことが分かる。現在では話劇で同作を上演することはなくなったが、上海の地方劇である滬劇の演目には残存しており、滬劇のレパートリーとして知られているという⁴²。滬劇でも歌唱により母の思いを歌い上げる見せ場など、母と娘の愛情に重点が置かれた内容となっている⁴³。

本論の調査により、『ウィンダミア夫人の扇』という一作品が時代を経ていく過程で、話劇からラジオ劇、そして滑稽戯へと変容していったことが判明した。このことは、話劇の初期の形態である文明戯が次第に通俗化し、やがて遊戯場の中の通俗劇として残存し、今も地方劇の演目の中に存在していることと一致する。話劇の変遷の過程においても、文明戯と同様に演目によっては通俗化し、地方劇の演目として変容した形で残存していることを証明しており、非常に興味深い結果となった。今後他の作品についても、話劇というジャンルに限らず、通俗話劇や地方劇にまで視野を広げることで、変遷の履歴が明らかになる可能性を示唆している。他の作品の変遷については、今後課題として取り組んでいきたい。

註：本稿は独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）（課題番号23720087 研究課題「中国近代における学生演劇の系譜」平成23年度～平成26年度）の研究成果である。

42 2014年5月の中国現代演劇研究会に於いて、滬劇の演目に同作が残存するという指摘を受けた。

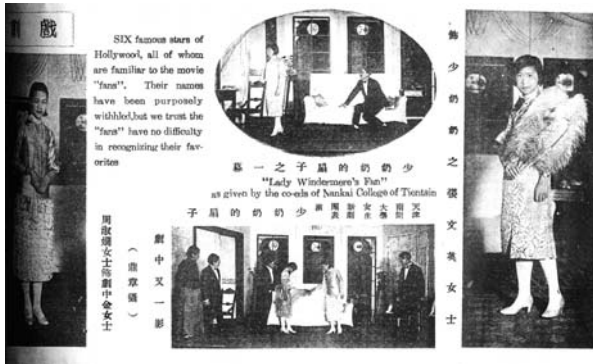
43 主演は馬莉莉、呂賢麗、李建華。話劇では四幕だが、滬劇では五幕となり、母親である金女士は「交際花」として蔑まれる存在であることが強調され、婚姻の不自由さと境遇の哀れさ、そして慈母としての最後など話劇より中国化した物語性を持っている。立命館大学の三須祐介氏に滬劇のVCD作品をお借りした。ここに感謝の意を表す。



資料① 『申報』(1924年6月22日)に掲載された中国公学商科大学の上演写真



資料② 『良友画報』(1930年10月号)に掲載された主演の女子学生



資料③ 『良友画報』(1927年7月号)に掲載された上演記事



資料④ 映画版(洪深監督1928年)広告

中西(一〇四〇)下午七時一刻至八時
 「少奶的扇子」
 少奶的扇子，是英國文壇怪傑王德爾氏原著，在中國舞台上上演過幾次，這次我們把它改編成滑稽的劇本。這幕劇的故事，是敘述一個少奶的身世，一全之錯，差一點變成大錯，後來幸虧她的母親救了。

資料⑤ ラジオ劇のプログラム



資料⑥ 遊戯場での上演広告(『申報』)

【附録】『申報』掲載『ウィンダミア夫人の扇』関連記事

以下は論文執筆の際に参照した記事一覧である。なお、1924年の上海戯劇協社の上演記事は、すでに瀬戸宏『中国話劇成立史研究』（pp.384～386）にまとめられており、そちらを参照されたい。筆署名のあるものは筆署名、タイトルの順に並べた。

- 1924/4/29 18378号 戯劇協社公演英國名劇
1924/5/8 18387号 評戯劇社「少奶奶的扇子」
 覺 新劇之進歩
1924/6/12 18422号 四校表演戯劇
1924/6/16 18426号 「少奶奶的扇子」摹演記
1924/6/21 18431号 戯劇協社重演「少奶奶的扇子」
1924/6/22 18432号 「少奶奶的扇子」之重演期
1924/7/1 18441号 紅霞「少奶奶的扇子」昨晚重演
1925/11/30 18950号 陳憲謨 學生演劇最低の限度
1926/2/16 19020号 電影界 開映「少奶奶的扇子」之盛況
1926/2/24 19028号 戯劇協社將舉行聚餐
1926/4/30 19093号 上海大亞影片有限公司謹啓洪深爲「少奶奶的扇子」啓事
1926/5/4 19097号 谷劍塵 洪深與「少奶奶的扇子」(上)
1926/5/5 19098号 谷劍塵 洪深與少奶奶的扇子(下)
1927/7/25 19529号 周瘦鵬 曼歌倩舞錄
1927/7/27 19531号 上海婦女慰勞北伐前敵兵士會表演
1927/8/1 19536号 紫 紅氍毹
1927/8/4 19539号 婦女慰勞會演劇消息
1927/8/5 19540号 婦女慰勞會演劇續聞
1927/8/5 19540号 上海婦女慰勞會劇藝大會
1927/8/6 19541号 周瘦鵬 驚才絕艷之「少奶奶的扇子」
1929/5/26 20179号 劇場消息
1929/7/11 20223号 東吳大學の四大金剛 心蘭紅黑合記
1930/1/10 20403号 婦女節制會遊藝會消息
1930/1/18 20411号 周世勳 大會堂之夜
1930/5/26 20531号 吳楨 我所認識的導演應雲衛先生
1930/6/5 20540号 培成女生將演「少奶奶的扇子」
1930/6/8 20543号 木 忙煞了培成的女生
1930/6/19 20554号 劍 培成公演的「少奶奶的扇子」
1930/6/29 20564号 「少奶奶的扇子」培成女學於六月十六十七兩日在夏令配克戲園演王爾德氏之「少奶奶的扇子」此圖
1931/3/25 20823号 裨文游藝大會預誌
1931/6/21 20909号 青年園地 關於狂風暴雨的公演 谷劍塵君來信
1936/5/7 22635号 李一 「少奶奶的扇子」觀後
1936/9/7 「中旅」的新戲「祖國」今日東遊各界試演
1940/7/8 23830号 今明祇演夜場「少奶奶的扇子」
1941/3/10, 11 24066号, 24067号 今明兩天復旦劇社假座公演「少奶奶的扇子」

1941/5/7 24123 号 東吳大學籌募基金公演少奶奶的扇子一幕左陳太太（陶嵐影飾）右少奶奶（葉玫珍飾）

1942/9/2 24590 号 一青 游藝界蘭心復業有期 陸露明打頭陳